

「翻訳の世界」を探求する

2004年4月1日発行（毎月1回1日発行）第29巻5号（通巻380号）
昭和52年2月3日第3種郵便物認可



e-trans

4

April
2004

e-trans.co.jp

特集 新訳の世紀！2003年ベスト翻訳書は

村上春樹訳『キャッチャー』



第2特集

e-trans technology
翻訳に役立つツール
の未来と現在

ディズニー・アニメ新作
「ブラザー・ベア」
プロデューサー
チャック・ウィリアムス氏 来日！

本誌は環境にやさしいECO-PULPを使用しています。

【翻訳者のためのポータル】グローバル ナレッジ ガーデン
www.knowledge-garden.net

用語集の訳語を完全活用

スーパーエイチティースリー

SuperHT³とはどんなソフトか？

有限会社アトリエ・ワン SuperHT³ 事業室 貝島良太さん

SuperHT³は貝島良太さんが(株)日立国際ビジネスに在職中に開発した、訳語および用語統一用のソフト、HT³の改良版だ。翻訳で使えば訳語付与と翻訳支援に使用でき、また用語の統一にも効果がある。日米特許も取得しているという、この多機能で非常に役に立つユニークなソフトについて、お話を伺った。

翻訳の現場の要請から生まれたソフト

貝島さんは(株)日立製作所在職中に2年間、翻訳ソフトの開発に携わったことがある。その時、自由な文章表現に対しての対応が難しい翻訳ソフトに限界を感じたそうだ。

「機械翻訳では構文解析などかなり高度な作業を行っています。しかし翻訳の現場で一番問題なのは用語そのものにばらつきがあることなのです。用語がきちんと統一されていれば機械翻訳でもそこそこのレベルまでいく筈ですが、実際はそうなっていません。このことから、用語の統一がそうそうできていない現状と、その重要性が分かります」と貝島さん。

貝島さんが翻訳の現場で感じた問題を解決するSuperHT³とはどのようなソフトなのだろうか。

従来の用語集活用の問題点

翻訳において重要なことは誤訳や訳漏れがないことが第一だが、用語がきちんと統一されている、ということも文章の読み易さを決定する重要な要素だ。しかし、一つの言葉を表す表現・用語はいろいろなバリエーションを持っており、どれが一番いいのか、はそれぞれの文書が使用される状況による。例えば「フロッピーディスク」をどう表記するか、下記の例を見ていただきたい。

例：フロッピーディスク、フレキシブルディスク、フロッピー・ディスク、FD、F/D、アーカイブディスク、アーカイヴ・ディスク、アーカイブディスクなど

一つの「ものやこと」を表わす言葉が、同じ文書の中

で複数混在していれば当然読み難くなってしまい、読者に混乱を招く。したがって、特にマニュアルなどの技術翻訳の分野では、用語統一のために用語集の作成とその適用に力が注がれてきた。しかし、その適用は非常に面倒で、また検証には大変な労力が必要となる。

用語集の全てを適用することの無理

現状では膨大な数の用語を翻訳者が訳文に反映させるためには、いちいち用語集を確認する作業が必要になる。またその確認作業にはかなりの労力が必要となり、それに取られる時間も馬鹿にならない。ある用語を適用するにも、複数の表現が混在している場合、その表現バリエーションすべてに対して別々に一括置換を行なう必要がある。翻訳作業が時間に追われていけば、手作業で全ての用語を反映させるのは不可能といっても良い。また、その分野でベテランの翻訳者になればなるほど基本的な用語は頭に入っていることが前提になるため、逆に用語集を確認する作業が少なくなり、これが大きな落とし穴になるケースもある。

せっかく大きな用語集が用意されていても、その適用が個々人の作業に任されているのは、宝の持ち腐れになる可能性があるのだ。また用語集がきちんと活用されているのかをチェックするためには、仕上がった文書を最初から見直す作業が必要になり、全くの二度手間になる。

一方、MT(機械翻訳=翻訳ソフト)は機械的な用語の反映を行なうのには適しているが、原文がかなり統制されていない限りよい訳文が出ない。その修正作業を考えると、翻訳者が翻訳した方が速いという意見も多い。では翻訳者がきちんと用語集を反映させられるか、という先きの「用語は頭に入っている」という非常に曖昧な

用語集の訳語を完全活用 SuperHT³とはどんなソフトか?

状況になってしまっている。こうしたジレンマを解決する画期的なソフトが SuperHT³だ。

「飛び込んでくる辞書」が検索の無駄をなくす

用語適用で最も時間のロスとなるのが、用語を確認しようとして検索すると登録されていない、というケースだ。これを貝島さんは「空振り検索」と呼んでいるが、翻訳者にとってはストレスがたまる作業だ。しかし SuperHT³では、予め用語集に登録された語句があればソフトの方から登録があることを文字の色を変えて知らせてくる。これが「飛び込んでくる辞書」の機能である。登録されている語かどうか、が一目で分かるので、翻訳者が用語集をいちいち引く必要がない。着色されていない語は用語集には登録されていないので、検索する必要がないわけだ (図1参照)。

また、訳語の取り込みもボタン一つで可能。作業画面の [採用] ボタンを押すと着色された単語が文章の中に入ってくる (図2参照)。用語集の用語と一致 (ヒット) した用語の適用はボタン一つで簡単に行なうことができる。用語の適用は自動ではなく、翻訳者が行なう。つまり翻訳者が訳文を確認しながら、用語集の訳語を完全に適用することができる。無駄な「空振り検索」が無くなり、翻訳者の時間とストレスが大幅に軽減される機能と言えるだろう。貝島さんご自身は、このような用語集活用ソフトを使って訳語付与を行ない、翻訳者自身が付与された訳語を取り込みながら手翻訳するのが、現時点でもっとも高品質の訳文を生み出す方法、と考えているようだ。

異表記にも対応する「かにかの原理」の辞書

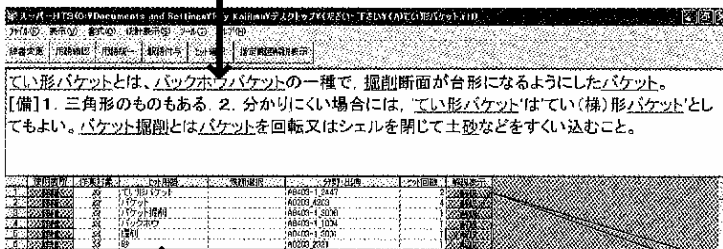
もうひとつ SuperHT³で画期的なのは、統一したい表記 (標準表記) の他の表現 (異表記) を用語集に登録しておけば、どちらの表現にも対応できるという点だ。これには SuperHT³の用語集 (辞書) の構造が重要な役割を果たしている。

SuperHT³を翻訳で使用する場合、訳語付与ソフトとして活用することが基本となる。例えば英語⇄日本語で使用する場合、SuperHT³の辞書 (用語集) の基本構成は英・日それぞれの言語での標準表記の組み合わせと、それに対応する異表記の組み合わせとなる。これを視覚的に表現すると蟹 (かにか) の形となる (図3参照)。つまり標準表記の組み合わせが甲羅の部分、それぞれの標準表記に対応する異表記が甲羅からでた手脚と考えるわけだ。

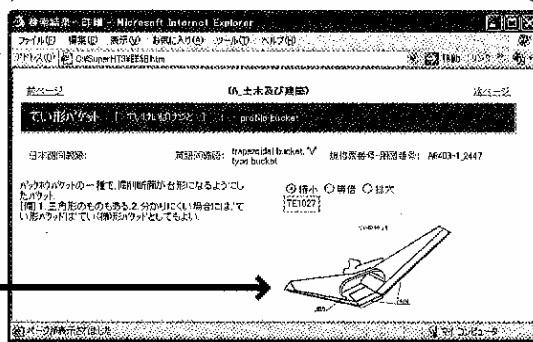
図1 SuperHT³の作業画面 (日英翻訳の場合)

翻訳する原文 (日本語) を作業画面に貼りつけ、用語確認ボタンを押すと用語集に登録されている語が青く着色される。

アンダーラインの語句は水色になる。
(標準表記が辞書に登録されている。異表記の場合はピンク色になる)



このウィンドウでヒットした用語の詳細な情報を見ることができる。
用語集の「解説欄」に参照できる情報を入れておくと用語適用の際に参照できる。



このような図も入れておくことができる。

[JIS工業用大辞典第5版対応より]

図2 訳語付与を行なったところ

訳語付与ボタンをクリックすると辞書に登録された日本語に対応した標準表記の英訳語がピンクに着色されて付与される。

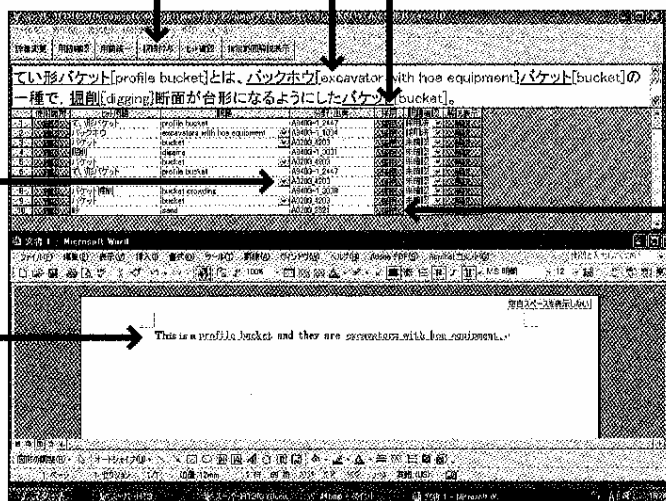
訳語付与ボタン

採用ボタン (採用ボタンをクリックしたところは“採用済み”となる)

訳語に▼があるものは他にも登録語があることを意味する。

採用ボタンを押すとWordの文中に訳語がピンク色で取り込める。

訳語を参照しながらWordの画面(下のウィンドウ)で英訳文を手打ち入力していく。



※ Word画面の英文は作業を見せるためのサンプルですので正しくありません。

用語の標準表記のペアを中心として、それぞれの用語の異表記を登録することで、標準表記の適用から異表記の適用まで自由に行なえる。これが貝島さんが「かに(蟹)の原理」と呼ぶ用語の構造だ。

翻訳後の訳文チェックでは、用語が「飛び込んでくる辞書」によって標準表記は水色、異表記はピンク色に色分けされる。翻訳者は標準表記(水色)のところは安心でき、異表記(ピンク色)のところはボタン一つで標準表記に置換できる。

一つの用語集(辞書)をリバーシブルに使えるため、用語集活用結果のチェックが可能に

用語の適用についてクライアント側から見ると、従来は完全に用語が適用されているかどうかのチェックには、最初からすべてのテキストを見直す以外は方法がなかった。しかしそれは事実上不可能であり、サンプル的にいくつかの語を検索してチェックするか、全面的に翻訳者を信頼するしかなかったと言えるだろう。しかし翻訳者が使用したのと同じ用語集を使えば、**SuperHT³**に

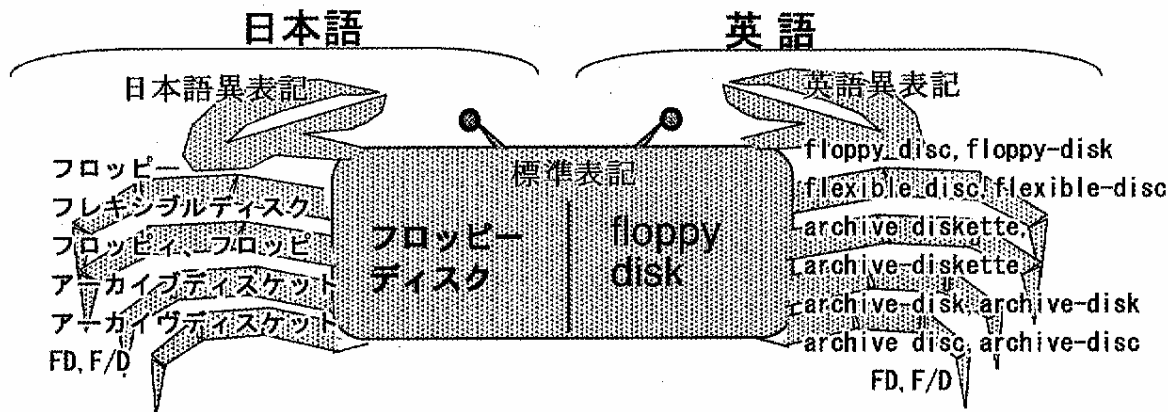


図3

標準表記と異表記に関するSuperHT³の基本概念(かにの原理)

用語集の訳語を完全に活用 SuperHT³とはどんなソフトか?

よってクライアント側でもチェックを行なうことが可能だ(図4参照)。

これは SuperHT³の辞書が2つの言語の間でリバーシブルに利用できることで可能になった。左の言語から右の言語へ、右の言語から左の言語へと左右に行け、かのにの横ばいにも通じることから「かのにの原理」としたそうだ。従来の辞書ツールでは2カ国語間の翻訳の場合、それぞれに専用の辞書を作成する必要があった。しかし「かのにの構造」をもつ SuperHT³では、一つの辞書をどちらの言語の方向からでも使えるため、和英の辞書を英和辞書としても活用できるのだ。この構造を利用すると作成した訳文の用語適用のチェックを後から行なうことができる。

例えば日英の翻訳の場合、仕上がった英文を SuperHT³でチェックすると標準表記の用語を適用した部分は水色になる。これで英語の標準表記が使用されていることが分かる。ピンク色になっていれば、翻訳者が意図的に異表記の用語を使ったと判断できるため、その部分について翻訳者に確認すれば用語に関するチェックが終わってしまうわけだ。ネイティブチェッカーなども

交え、その時点でどちらの表現がより適切かを話し合えば、用語集の完成度をより高めることができる。

また、翻訳者が作業状況を保持して残したい場合は、翻訳途中で文字が着色した段階でこまめにファイルを保存すれば良い。これでクライアント側に用語集の完全な適用を証明することができる。

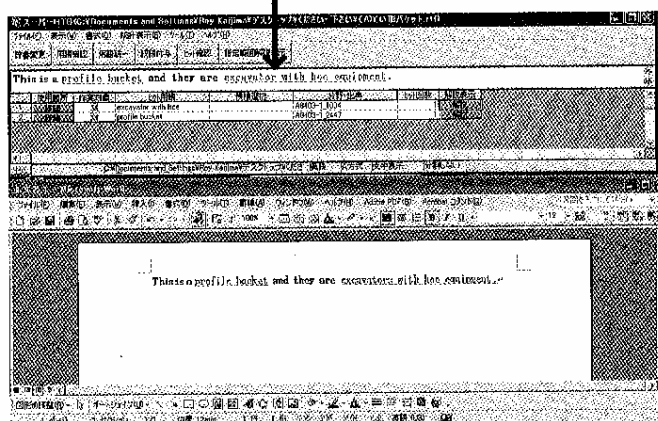
従来は翻訳ソフトを使用すれば用語の適用は可能でも、それを後から確認することができなかった。このプロセスが可能な SuperHT³は能率と適用の確実性の上でも大きな利点を持っている。

SuperHT³の辞書はExcelで簡単に作成できる

SuperHT³には辞書(用語集)は付属していない。産業翻訳で使用する場合はクライアントの用語集を利用することができるが、このソフトを利用するためにはまず辞書を作成することが必要となる。辞書の作成にはExcelを利用したHT3形式のシートに、標準表記と異表記の組み合わせを入力していく。辞書(用語集)を最初から完璧にすることは難しいので、修正・更新は不可欠だが、Excelを利用することで簡単にこれらの作業を行

図4 用語適用の確認

作成した文章を SuperHT³の作業画面に取り込むと、標準表記が採用されている部分は水色になり、用語集の適用が確認できる。



※ Word画面の英文は作業を見せるためのサンプルですので正しくありません。

なうことができる。ちなみに財団法人日本規格協会が出している『工業用語大辞典』第5版のCD-ROM版には**SuperHT³**が付属しているので、これを利用することも可能だ(価格52,000円)。

「かへの半身」を使って 翻訳する原文の表記を統一

SuperHT³は2カ国語対応になっているが、2カ国語にまたがる使い方だけでなく言わば「かへの半身」だけを使った、日本語(日日)、英語(英英)などの用語統一だけでも使うことができる。これも「標準表記」と「異表記」の組み合わせによって行なうのだが、この機能を使えば、自由な規則性のない表現を統一した表現にすることができる。これは訳文の品質向上にも重要な要素になるといえる。

貝島さんが前職の(株)日立国際ビジネスでドキュメント業務に携わっていた当時、もっとも気になった問題点は、クライアントから渡される用語集の用語をクライアント自身がきちんと守っていないケースが多い、ということだったそうだ。

例：コンピュータ/コンピューター など。

上の例は語尾に「長音符」があるかないかの差だが、これだけで検索にかからなくなってしまう。そこで貝島さんは、用字用語などの文章表現のブレを統一し、日本語の書き直しにも使えないものか、と考えた。

SuperHT³の辞書部分の標準表記と異表記の組み合わせを使って、異表記の表示になった部分を標準表記に置き換えていけば、文章表現の統一が可能になる。また、日本語で執筆をする場合にも辞書の作り方を工夫すれば「ください/下さい」などの正しい使い分けや「挨拶⇒あいさつ」などの表記の統一ができ、用字用語に関して統一のとれた文書にすることができるようになる。これは新聞社や雑誌社の記者、編集者にとっても魅力的な機能となるだろう。

現在貝島さんはこのような使い方を想定して、共同通信社の『記者ハンドブック第9版』を2004年9月完成を目標に**SuperHT³**で使用できるよう入力中だ。これが完成すれば、一般紙が採用している用字用語規則にのっ

とった文書作成と同じことができるようになる。完成を楽しみに待ちたい(ただし、『記者ハンドブック』発行元、共同通信社法務部では、第三者への配布は許可しないとされており折衝中とのこと)。

なぜ異表記の登録が大切なのか

日英翻訳で、日本語文が自由に書かれていて、どんな用語が使われているか分からない場合も、異表記が登録されていれば、その中で一致するものを英語の標準表記に変換すればいいことになる。日本語で異表記が使われていても、それが用語集に登録されていれば気にせず付与された標準表記を使って、用語統一された英語に翻訳することができる。その場合英語の異表記は考慮する必要がない。これは英日翻訳の場合も同じだ。2カ国語の異表記をきちんと登録しておくことで、自由に書いた原文を統一した訳文に変換できるわけだ。

また、異表記にはよくやる間違いをいれておくことが重要、と貝島さんは語る。例えば機械の分野で centering という中心を出す作業を指す用語がある。日本語では「しんだし」といい、90%の人は「芯出し」と書いてしまうそうだ。正解は「心だし」だ。こういったものも異表記に入れておくことで用語がヒットする確率がさらに高くなるのだ。

SuperHT³が利用可能な文書

SuperHT³でチェック可能な文書はテキスト(txt)、リッチテキスト(rtf)、Word(doc)の3つ。Excel、HTMLなどはそのままでは利用できない。この場合はコピー・ペーストでWord文章として保存したものを、**SuperHT³**に取り込んで作業を行なった後、もとの形式に直す必要がある。

産業翻訳ではTRADOSは必須になっているが、TRADOSのドキュメントを扱う場合はどうなのだろうか。TRADOSのドキュメントファイルは表面には出ていないが裏でタグがついている。これをタグつきのままで**SuperHT³**に貼り付ければ使用可能になる。その場合、1、0といった数字が辞書に入っているとヒットしてチェックが入ってしまうので、辞書からはずすのが賢明。タグ文字の中にヒットする文字があればその文字を辞書から削除しておけば目障りなヒットがなくなる。

用語集の訳語を完全に活用 SuperHT³とはどんなソフトか?

通常 SuperHT³の用語確認機能の色分けモードでは、Word 文書中の原稿にボールド、イタリック、色文字などの文字属性がある場合は、属性が失われるため、文字属性を残しておきたい場合は Word の蛍光ペン機能を利用することで、属性が失われないようにする機能を昨年追加した。これはある翻訳会社からの要請で改良したのだという。

使い手の工夫しだいで大きくひろがる活用法

このようにさまざまな特徴を持つ SuperHT³だが、あくまでもツールなので、工夫しだいでいろいろな使い方ができる。SuperHT³が扱うのは文字列の情報なのだが、文字列であれば一文字から 200 バイトまで対象にすることができる。したがって単なる辞書活用ツールとしてだけでなく、例えば 8 桁のコードを 12 桁のコードに変換するのも簡単にできるわけだ。実際に、ある医療情報機関ではそれまで使っていた診療コードシステムの桁数を増すことになった。そこで新旧コードの書き換えに SuperHT³を使用したところ非常に短期間でコードの入れ替えが完了したそうだ。

また、翻訳後の日本語表現のチェッカーとして使用している例もある。翻訳ソフトを積極的に活用している実務翻訳者の久徳省三氏（社団法人日本翻訳家連盟理事、同連盟の翻訳支援ツール委員会会長）である。久徳氏は間違いやすい用語約 50 語の辞書を自作し、SuperHT³を使い英日翻訳後の日本語表現の統一をしておられる。従来はこの確認作業をエディタの【検索】で行っていた。約六万字の和訳文をチェックするのに 1 時間程度かかっていたが、SuperHT³を使うとそれがたったの 6 分で完了してしまうそうだ。

SuperHT³はパソコン 1 台あたりの価格が 38,000 円となっている。企業での使用には別途サイトライセンス料が設定されている。詳しい情報については有限会社アトリエ・ワンのウェブサイト <http://www.bow-wow.jp/sht3/> をご覧いただきたい。

推奨環境

Windows 98、Me、NT4.0 Service Pack3～5、2000、XP

Word 97、98、2000、2002、2003 Excel 97、2000、2002、2003

IE 5、5.5 または 6.0

CPU: Intel Pentium II 500MHz 以上および同等クラスのプロセッサ

メモリ: 最低 64MB, 推奨 128MB 以上

プログラム容量: プログラム本体およびヘルプ合計約 15MB

かいじまりようた

1945 年、静岡県生まれ。1968 年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。同年 (株) 日立製作所に入社。鉄道車両、電力機器、小型ディスクなどの輸出営業に 13 年間、海外現地法人統括部門に 2 年間、日立の日英機械翻訳研究開発に 2 年間、(株) 国際ビジネスサービス (現株) 日立国際ビジネス) の設立準備に 2 年間従事。1987 年新会社設立と同時に同社に出向。ドキュメント部門を 8 年間担当。開発部門を設立し 1996 年に用語集超活用ソフト HT³を開発。2000 年に日米特許を取得。2001 年に改良版の SuperHT³を開発。2002 年に日立国際ビジネスを退社。(有) アトリエ・ワンに SuperHT³事業室を開設、室長に就任現在に至る。
有限会社アトリエ・ワン 取締役 SuperHT³事業室室長
十文字学園女子大学 非常勤講師 (貿易実務)
JTF 会員 (翻訳支援ツール委員)、AAMT 会員、TC 協会会員、情報知識学会会員
roy_kajima@h8.dion.ne.jp
<http://www.bow-wow.jp/>

